

HPTLCによる国内流通生薬の成分比較

○天倉 吉章¹, 瀨野 裕之², 山上 沙織¹, 好村 守生¹, 吉田 隆志¹, 合田 幸広³, 川原 信夫² (¹松山大薬, ²医薬基盤研薬植物セ, ³国立衛研)

【目的】薬用植物資源の安定供給並びに標準化を指向し、国内で使用される生薬情報の共有化と、その多様性の範囲確認を目的として「薬用植物総合データベース」の構築が現在進められている。我々はその一環として、日本薬局方（局方）収載生薬について、国内流通品の成分比較を実施しており、先にオウゴン、ソウジュツについて TLC 分析の結果を報告した。今回、新たに 5 生薬（カンゾウ、ケイヒ、ショウキョウ、ニンジン、オウレン）について、国内流通品の HPTLC（高性能薄層クロマトグラフィー）による含有成分の比較調査を行った。

【方法】試料として、国内市場流通品のカンゾウ（16 品）、ケイヒ（17 品）、ショウキョウ（10 品）、ニンジン（16 品）、オウレン（10 品）を用いた。各試料および標準溶液の調製は、すべて局方に準じ実施した。薄層板はメルク社の HPTLC を用い、試料溶液の塗布条件を一定にするため、リノマート V（カマグ社）により試料注入を行った。TLC 画像については、TLC ビジュアライザー（カマグ社）を用いて撮影した。生薬中の主要成分については、HPLC による定量分析も実施した。

【結果および考察】カンゾウでは、グリチルリチン酸を標準溶液として HPTLC 分析を行った結果、すべての製品にグリチルリチン酸のスポットが鮮明に確認でき、他成分の分離も良好であった。各製品中のグリチルリチン酸含有率を検討した結果、2.90～8.19%と 2.8 倍の差が観測された。ニンジンでは、ギンセノシド類のスポットが分離よく確認できた。ギンセノシド R_{g1} および R_{b1} の含有率は、0.22～0.86%、0.31～1.54%であり、3.9 倍、4.9 倍の含量差が確認された。その他の生薬についても HPTLC による分離良好な画像データを得ることができ、視覚判断可能な一斉分析データとして、有用な資料になると考えられる。